

佐賀市文化財調査報告書第16集

泉 遺 跡

昭和 61 年 3 月

佐賀市教育委員会



序

昭和55年度より佐賀市においても南部地域から圃場整備事業が推進されています。久保泉地区も昭和60年度より着工されるということで、昭和59年度秋に確認調査を実施し、60年7月の調査となりました。

調査の結果、土壙、住居址状遺構、溝等が発見され、時期的には中世の所産であることがわかりました。佐賀地方では中世の資料として、文献はいくつか存在していますが、考古学的にはほとんど解明されていませんので、今回の成果は中世研究の一資料となり得るものと考えます。

その成果をここに発掘調査報告書としてまとめ、学術資料として、また地元の方々の文化財保護に対する理解の一助として役立てていただければ幸いです。

なお、この調査にあたって県中部農林、県文化課、佐賀市土地改良区ならびに地元の方々の深い御理解と御協力に對して心からお礼申し上げます。

昭和61年3月31日

佐賀市教育委員会

教育長 山 田 清 人

例 言

1. 本書は国庫補助事業として昭和60年度に発掘調査を実施した泉遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は佐賀市教育委員会が主体となり実施した。
3. 遺物の復元は西首金子・鬼崎玲子・原田黎子が行った。遺物の実測・製図は野中須矢・島京子が行った。
4. 本書の執筆・編集は福田が担当した。

本文目次

	頁
I はじめに	
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の組織	1
II 位置と環境	
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	1
III 遺 構	
(1) 住居址状遺構	4
(2) 土 墳	4
(3) 溝	6
(4) その他の遺構	7
IV 遺 物(観察表)	7
V ま と め	11
付 記	12

挿 図 目 次

Fig. 1	泉遺跡周辺遺跡分布図	2
Fig. 2	遺跡周辺見取図	3
Fig. 3	S B 001住居址実測図	4
Fig. 4	S K 001、S K 003土壇、S D 004溝実測図	5
Fig. 5	泉遺跡出土土器・石器実測図	9
Fig. 6	久保泉地区出土土器実測図	13
Fig. 7	泉遺跡遺構配置図	折り込み

表 目 次

Tab. 1	泉遺跡出土土器、石器観察表	7
Tab. 2	久保泉地区出土土器観察表	12

図 版 目 次

図版 1	1. 発掘調査前 (B地区) 2. A、B地区遠景 3. 発掘調査前 (C地区)
図版 2	1. 住居址遺構 (B地区) 2. B地区全景
図版 3	1. S D 001、S D 002溝 2. S D 003溝 (表土はぎ後)
図版 4	1. S D 001、002溝 2. 第1トレンチ (SD001、002延長部)
図版 5	1. S D 003溝 2. S D 003溝
図版 6	1. S D 003溝 2. S K 001、S K 003土壇、S D 004溝
図版 7	1. 第3トレンチ 2. 第3トレンチ
図版 8	1. 第2トレンチ 2. 第2トレンチ
図版 9	1. 表土はぎ状況 2. 遺構検出状況
図版10	泉遺跡出土遺物

I はじめに

(1) 調査に至る経過

佐賀市の農業基盤整備事業は昭和56年度より本格的に開始されたが、それは佐賀市でも干拓地及びその周辺にあたり、本調査を要した遺跡としては昭和56年度秋に実施した柴尾橋下流遺跡発掘調査のみであった。

この久保泉地区も昭和60年度より工事が開始されることになったので、昭和59年度秋に施工予定地区の確認調査を実施した。その結果、低丘陵の畑地と、比較的高い位置にある水田の三地点で遺跡が確認され、内二地点の約1,200平方メートルを調査対象とした。調査は梅雨あけの7月に開始し、酷暑の8月中旬に終了した。

(2) 調査の組織

調査主体者 佐賀市教育委員会

調査担当者 佐賀市教育委員会

事務局 中村 弘（社会教育課長）

北原 学（社会教育課長補佐）、江川光男（同 左）

調査員 福田義彦（社会教育課文化係）

調査協力 佐賀市土地改良課、(株)新九州測量、(有)江下建設

II 位置と環境

(1) 地理的環境

泉遺跡は佐賀市久保泉町大字下和泉字三本栗に所在し、遺跡の範囲は同町大字上和泉町にまで及んでいる。

背振山系から南方に広がる平野にはいたる所に舌状の微高地があるが、当遺跡もその基部の中ほどに位置している。標高は8～9メートルを計り、近接する水田との比高差は0.5～1.0メートル程度である。微高地自体の長さは300メートル程度で、その中央付近を農業用水の横落水路により南北に分断されている。

(2) 歴史的環境

当地は古くから遺跡の密集地帯として知られているが、本格的な調査を実施した遺跡としては九州横断自動車道建設に伴う、丸山遺跡^{#1}、鈴熊遺跡^{#2}、西原遺跡^{#3}と一般開発に伴う琵琶原遺跡^{#4}の四遺跡を数えるにすぎない。これらの遺跡は山麓部や低丘陵に所在するもので、当遺跡のような立地条件にあるものの調査は同町櫟木遺跡^{#5}の応急調査以外にはほとんどないといつてよい。この櫟木遺跡のカメ棺墓からクリス型銅剣鏃型が検出され特筆に値するものであるが、調査期間に制約がありその全容は確認されていない。

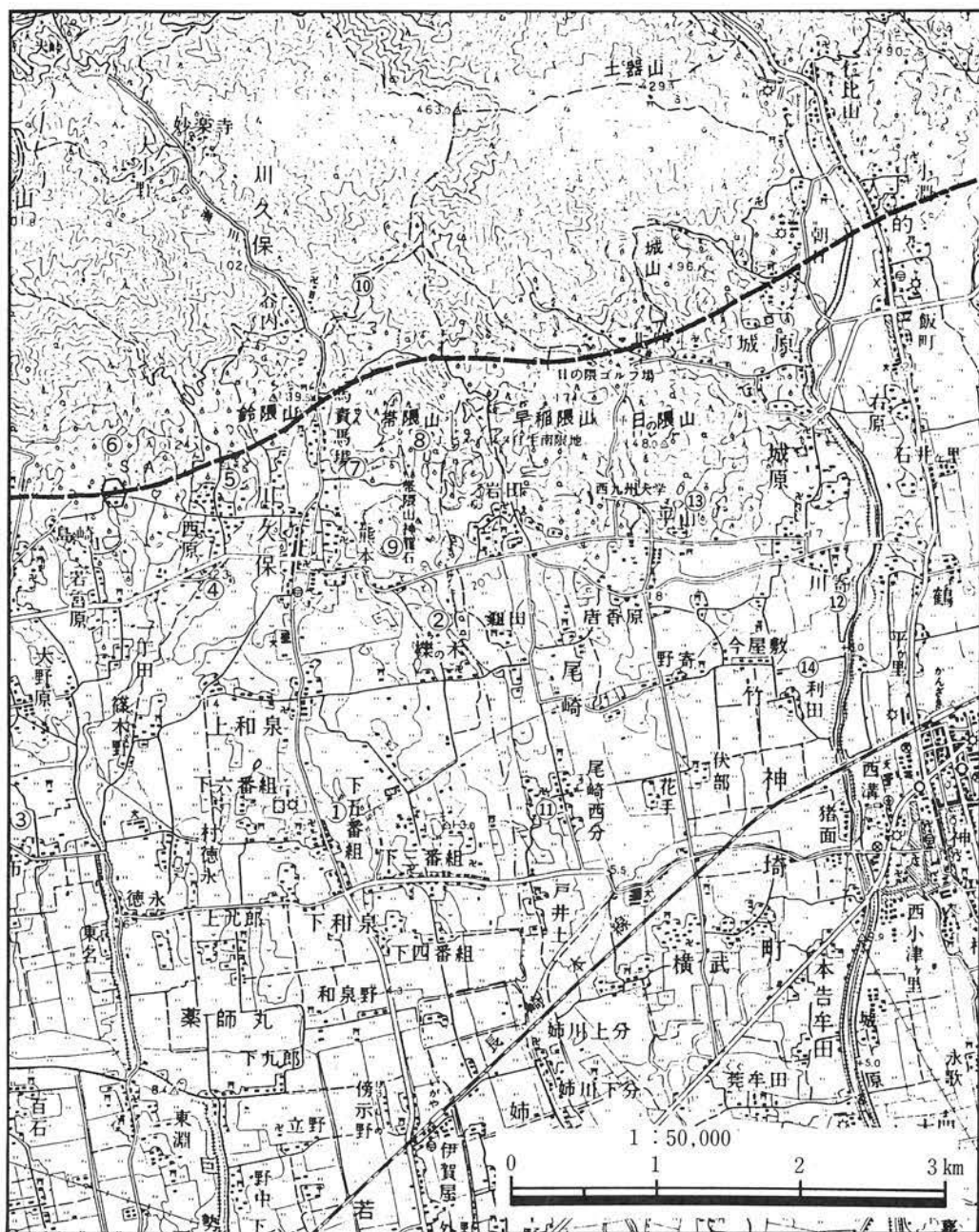


Fig. 1 泉遺跡周辺遺跡分布図

1. 泉遺跡 2. 櫟の木遺跡 3. 久富遺跡 4. 琵琶原遺跡 5. 西原古墳群
6. 丸山遺跡 (移設置) 7. 関行丸前方後円墳 8. 帯隈山神籠石
9. 熊本山石棺出土地 10. 不動滝竈址 11. 尾崎利田遺跡
12. 川寄若宮遺跡 13. 山崎古墳群 14. 利田柳遺跡

注1 佐賀県教育委員会 『丸山遺跡』概報

注2 佐賀県教育委員会

注3 佐賀県教育委員会

注4 佐賀市教育委員会 『琵琶原遺跡』1980



Fig. 2 遺跡周辺見取図

III 遺 構

B・C地点において住居址状遺構1基、大溝3条、小溝多数、土壇3基を検出した。

(1) 住居址状遺構

B地点はC地点の水田面との比高が約1メートル程度ある。低丘陵で情状は畑となっている。この丘陵の、北端の水路予定地点を調査対象とした。遺構は地表下50センチメートル程度で検出し、B地点のほぼ中央南寄りに位置する。上面の平面形は隅丸方形を呈し東西4.6メートル、南北2.97メートル、深さ0.29メートル、を計る。長軸方向は座標北より、74°東に傾いている。壁面は比較的ゆるやかに掘込まれており、床面はわずかな起伏がある。遺構は黄褐色砂まじりの地山に掘り込まれており、床にはピット、炉址等の付設遺構は全く検出しなかった。

遺構埋土は黒色土層と淡黒褐色土層に大別でき、その中から土師器小皿の細片を微量に検出した。遺物はいずれも細片であるため明確な時期は不明であるが、その胎土等からしておそらく中世末～近世の所産であると考える。

(2) 土 壇

C地点の水田下約30センチメートルで3基検出した。

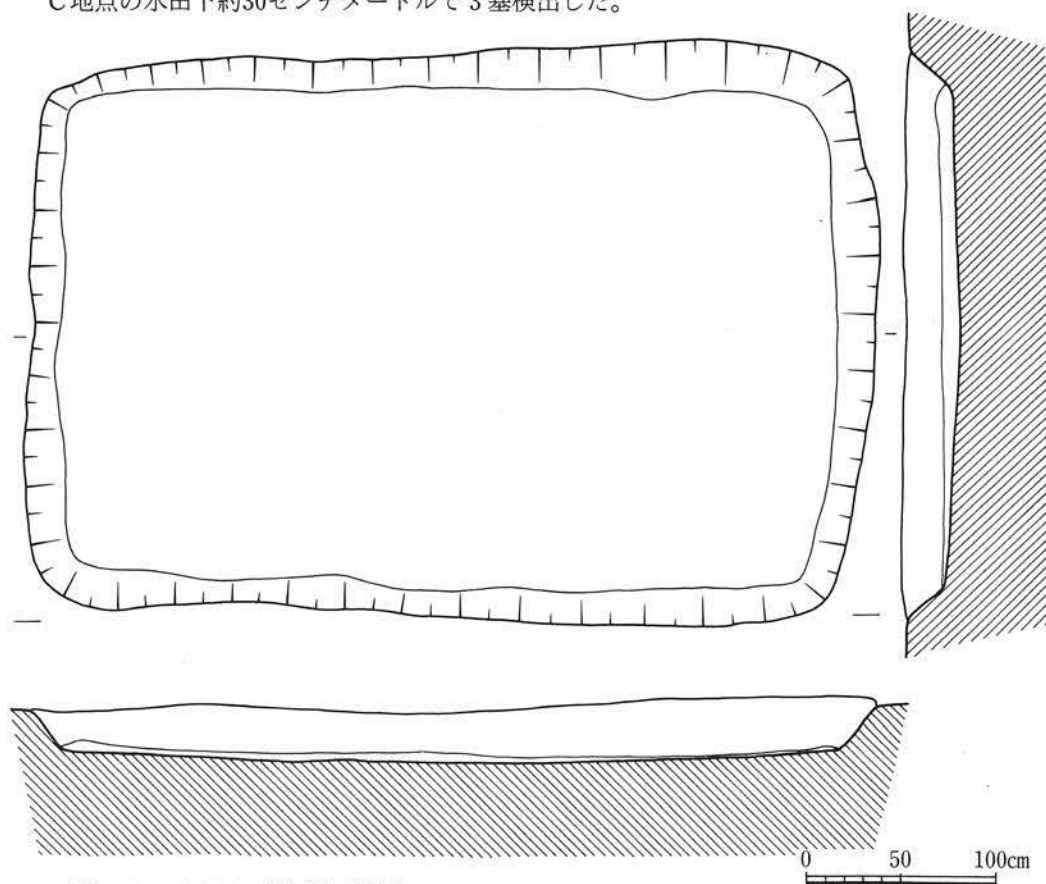


Fig. 3 S B001住居址実測図

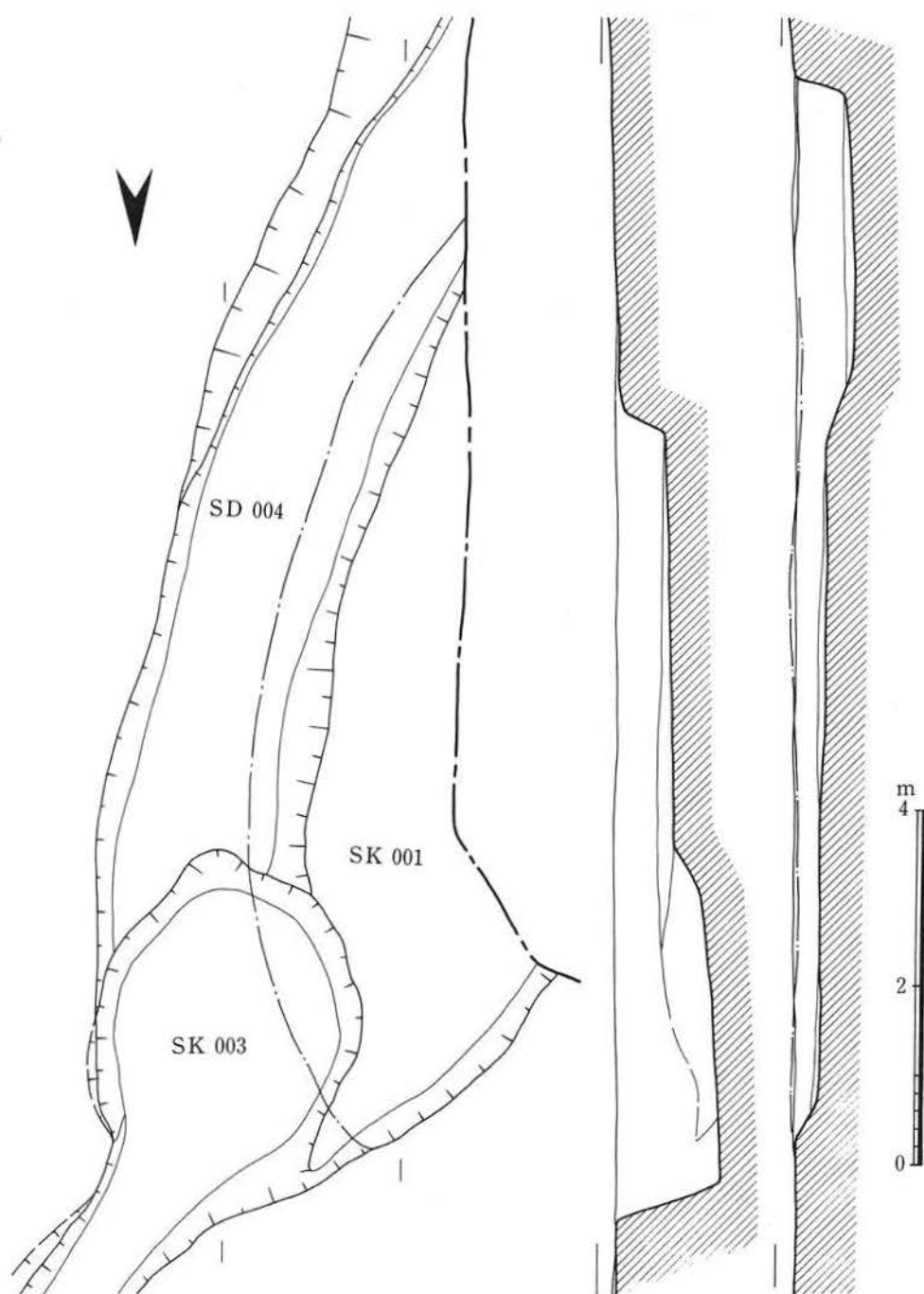


Fig. 4 SK001・SK003土壤・SD004溝実測図

SK001土壌はC地点北西部にあってSD003・SK003と切合い関係を有している。新旧関係は、SK001がSD003を切っていることは明確であったが、SK003との関係が不明瞭であった。平面形態は部分的調査しかできなかったので確かでないが、おそらく楕円形もしくは不整形となろう。深さは0.15～0.2メートルを測り北端がやや浅くなる傾向にある。埋土は黒色土層の中に黄褐色の細かい粘土ブロックが混入し、下部にいくに従い淡黒褐色となる。遺物は今回の調査では土師質土器片を数点検出したが、いずれも細片であった。なお、昭和59年度秋に確認調査の際、完形の土師質土器（小皿）を検出したが、その時のトレンチ位置から見てこの小皿はSK001土壌に伴うものと考ええる。

SK002土壌はC地点北西端にあって、上面の平面形は不整形を呈する。検出全長2.8メートル、最大幅1.08メートル、深さ0.05～0.25メートルを計る。埋土は淡暗褐色を呈しきめ細かい粘質土である。遺物は全く検出しなかった。

SK003はC地点北西部にあり、SK001、SD003と切合い関係を有する。また、北東部に上面幅0.5メートル程度の溝がこの土壌より派生しているように見えるが、これはSD003に関連のあるものだと考える。上面の平面形は楕円形を基調にした不整形で、壁は比較的角度をもって立ち上り、最深部は0.6メートルを測る。底面は起伏が多く、東端は壁に入り込み袋状を呈する。埋土は近接する二遺構のそれと大差ないが、下層になるにつれてやや黄色味を増す粘質土である。

(3) 溝

いわゆる生活址又は生産址としてとらえられる溝は三条検出した。それ以外は人為的なものには違わないが、いわゆる遺構としては考え難いので削除したい。

SD001溝はC地点東端にあって、SD002が確実に埋没した後に造られたもので、検出全長6.0メートル、幅0.83メートル、深さ0.1メートルを測る南流するものである。埋土は淡褐色で砂粒を多く含む。遺物は土師質小皿片や陶器片を少量検出した。時期的に見て近世の所産と考える。

SD002は上述のSD001中央を破壊されているものであるが、SD001の底面はSD002のそれにとどいていない。検出全長6.0メートルと、最大幅2.56メートル、深さ0.41メートルを測り、断面はU字形を呈する。SD001と同じく南流する溝である。埋土は淡黒褐色土層で下部になるにつれて砂粒、小石が増す。遺物は土師質土器片や石製品を微量に検出した。

SD003はC地点中央を東西に走る幅約1メートル、深さ0.2～0.3メートルの検出全長は約8メートルを測る。埋土は上層が灰混りの黒色土層で下層が淡黒褐色粘質土であった。遺物は主として上層より土師質土器片が少量出土した。

SD004はC地点西部にあって孤状を呈し、検出全長約6メートル、最大幅1.2メートル、深さ0.3～0.36メートルを測る。埋土は黒褐色でSK001のそれと大差ない。遺物は土器細片を微量検出した。

(4) その他の遺構

C地点の遺跡の南限を確認すべく、調査区南部に幅2メートル、長さ6～8メートル程度のトレンチを任意に4か所に設した。横落水路に隣接する付近で土塊状のものを1基検出したのみで他は全く検出しなかった。また、このトレンチで遺跡の存在する基盤層が調査区より2～3メートル以南から急速に下降することが判明し、南端は表土下1.2メートルを計った。当地点の北部については幹線水路予定部分にわずかにかかったものでこれもトレンチを設定したが表土下0.4～0.5メートルで地山を検出した。土層については黒色土が多量に検出されたので何らかの遺構があるのではと精査したが何も発見できず、遺物に関しても全く出土しなかった。

IV 遺 物

泉遺跡出土土器・石器観察表

(1) 口縁径
(2) 器 高
(3) 底 径 単位 (cm)

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	出土地点 そ の 他
1	坏	(1) 15.0(推) (2) 2.9 (3) 12.2(推)	体部はわずかに内湾しながら立ち上る	底部より体部に厚みがある 回転ヨコナデ 内部底部に押圧	
2	坏	(1) 15.2(推) (2) 2.0(残) (3) —	体部は内湾しながら立ち上る	回転ヨコナデ	
3	小 皿	(1) 8.1(推) (2) 1.5 (3) 6.4(推)	体部は内湾しながら立ち上る 口唇部に稜がある	回転ヨコナデ 糸切り	
4	坏	(1) — (2) 2.1(残) (3) 4.7	平底 体部は内湾しながら立ち上がる	回転ヨコナデ ロクロ 回転による稜 糸切り 板目	確 調 16トレンチ
5	坏	(1) — (2) 1.5(残) (3) 5.3	平底 内湾しながら立ち上る	回転ヨコナデ 糸切り 外面に炭化物付着	
6	小 皿	(1) — (2) 1.0(残) (3) 4.8(推)	平底 わずかに内湾しながら立ち上がる	回転ヨコナデ 内部見込みに回転による沈線をらせん状に入れる 糸切り	

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	出土地点 そ の 他
7	小 皿	(1) ——— (2) 0.8(残) (3) 5.4(推)	平底 内湾しながら立 ち上る	回転ヨコナデ 糸切り	
8	小 皿	(1) ——— (2) 0.8(残) (3) 4.5(推)	平底	回転ヨコナデ 糸切り	
9	小 皿	(1) ——— (2) 0.8(残) (3) 4.1(推)	平底	回転ヨコナデ 糸切り	
10	小 皿	(1) ——— (2) 1.8(残) (3) 3.2(推)	平底 わずかに内湾気 味に開く	回転ヨコナデ 糸切り	
11	小 皿	(1) ——— (2) 1.4(残) (3) 6.0(推)	平底 わずかに内湾気 味に開く	回転ヨコナデ 糸切り	
12	小 皿	(1) ——— (2) 2.2(残) (3) 3.9(推)	平底 内湾しながら立 ち上り開く	回転ヨコナデ 糸切り	
13	小 皿	(1) ——— (2) 1.2(残) (3) 5.5(推)	平底	回転ヨコナデ 糸切り	
14	小 皿	(1) ——— (2) 1.2(残) (3) 4.5	平底 内湾しながら立 ち上る	回転ヨコナデ 糸切り	
15	小 皿	(1) ——— (2) 1.2(残) (3) 6.0(推)	平底 内湾しながら立 ち上る	回転ヨコナデ 糸切り	
16	坏	(1) ——— (2) 3.6(残) (3)高台径 6.2(推)	内湾しながら立ち上る		確 調 55トレン チ
17	坏	(1) ——— (2) 0.7(残) (3)高台径 5.2(推)		磨滅のため不明	

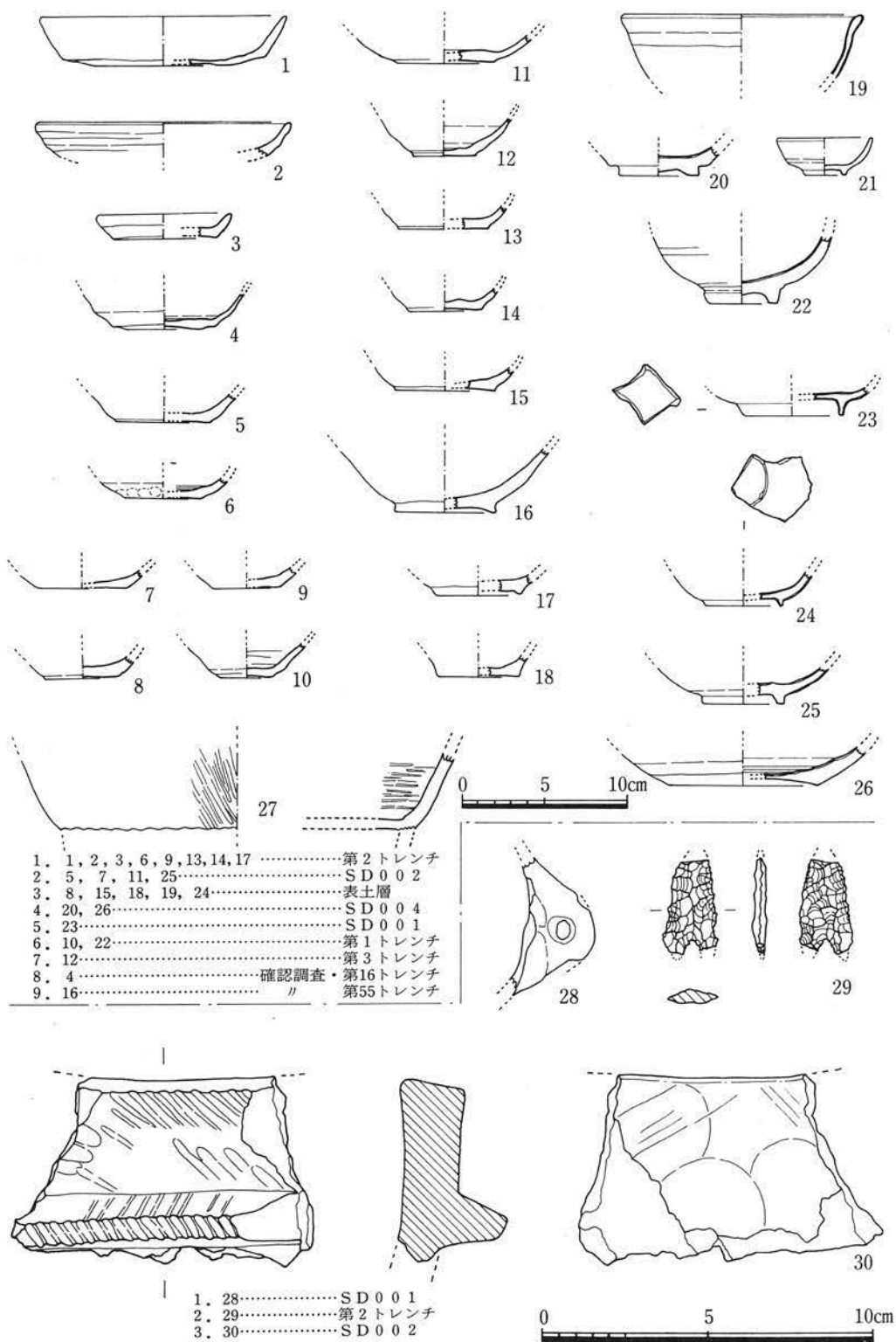


Fig. 5 泉遺跡出土土器・石器実測図

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	出土地点 そ の 他
18	小 皿	(1) — (2) 1.1(残) (3) 5.0(推)	平底	回転ヨコナデ 糸切り	
19	碗	(1) 14.3(推) (2) 3.8(残) (3) —		口縁下に沈線で連孤紋 を描きその下に垂線を 下ろす	青 磁
20	碗	(1) — (2) 1.2(残) (3)高台内径 3.4 高台外径 4.9	高台は低い 体部に立ち上りに稜を 有する		陶 器
21	坏	(1) 5.7(推) (2) 2.2 (3)高台内径 2.2 高台外径 2.5	体部は内湾しながら立 ち上る	ロクロ回転による 体部に紋様があるよう だが欠損のため不明	白 磁
22	碗	(1) — (2) 4.0(残) (3)高台内径 3.3(推) 高台外径 4.3(推)	体部は内湾しながら立 ち上る	外面、体部と高台から 体部に立ち上り際に回 転ヘラ削り	陶 器
23	碗	(1) — (2) 1.2(残) (3)高台径 6.1	体部は内湾しながら立 ち上る	ロクロ回転による	白 磁
24	碗	(1) — (2) 1.8(残) (3)高台内径 4.3(残) 高台外径 5.7(推)	高台は低い 体部は内湾しながら立 ち上る	ロクロ回転による 薄手である 貫入が入る	白 磁
25	碗	(1) — (2) 2.1(残) (3)高台円径 4.2(推) 高台外径 5.0(推)	高台は低い 体部は内湾しながら立 ち上る	ロクロ回転による 内部見込みに重ね積み 痕	白 磁
26	鉢	(1) — (2) 1.9(残) (3) 8.9(推)	平底で中央があげ底に なり薄くなる	ロクロ回転による稜を 有する	陶 器

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	出土地点 そ の 他
27	鉢	(1) — (2) 4.1(残) (3)擬似底径 21.5(推)	体部はわずかに内湾しながら立ち上る	内面木口状工具による ヨコ方向のナデ 外面、ヘラ状工具によるナナメ方向の削り	
28	取 手	(1) — (2) 3.9(残) (3) —		焼成前に穴をあける 内面側にハケ目痕	
29	矢じり	最大長 2.8(残) 最大幅 2.1 最大厚 4.0			讃岐石
30	石 鍋	最大長 5.4(残)		内外面とも丹念にヘラ磨き	滑 石

V ま と め

泉遺跡で検出した遺構、遺物は通常の遺跡調査の成果からすると質・量共に小規模であることは否めない。しかし、この遺跡は中世～近世に及ぶものであることは明らかであり、これは佐賀市内において非常に稀少価値をもつものであるということが言える。というのは、佐賀市内でのその時期の調査は非常に少ないのである。その調査例を年代順に挙げてみると、昭和53年度の高木城址確認調査、昭和58年度の蓮池上天神遺跡発掘調査、昭和59年度の東千布遺跡発掘調査がある。しかも高木城址と東千布遺跡の調査は非常に断片的な成果であり、蓮池上天神遺跡の調査がその出土遺物である輸入磁器、石帯の検出をもってわずかに文献で証明されている事項にむすびつくといった程度でしかない。

中世の佐賀地方はどのような状況であったろうか。著名な豪族の動向としては、高木氏や竜造寺氏などの武士団が鎌倉幕府の体制下に組み敷かれ、御家人と呼ばれる存在になっていった。佐賀地域にも鎌倉時代になると荘園が形成され、主なものとして、佐嘉荘、蠣久荘、巨勢荘、河副荘などがあった。市北部は城崎郷、深溝郷と呼し幕府直轄領であったが、時代の趨勢により国司や豪族によって私有地化していった。

中世末期になると、佐賀市の北部は高木氏、南部は竜造寺氏の勢力が強くなり、それらと相まって、少弐・千葉・渋川・神代氏などの地方豪族が台頭、衰退しつつには竜造寺氏、鍋島氏と推移していく。

久保泉地区の室町期の豪族としては神代氏が際立った存在であった。神代氏は先祖を武内宿

福としてあがめ、第51代神代宗元の頃佐賀の地に定着。その子の神代勝利は後年竜造寺隆信と覇を競い終には竜造寺一鍋島氏の被官となり幕府まで鍋島氏の親類として久保泉地区に所領を与えられ存続している。

ともあれ、この泉遺跡周辺は中世末～近世に至る遺跡であることはまちがいないが、出土した遺物の量や遺構から見て当時の村落の中心ではなく辺境に位置するものと考えられる。今後圃場整備事業が北進するにつれて、いずれ村落の中心部を調査することになるが、今回の調査がその時の調査、研究の一資料となれば幸いである。

付 記

久保泉地区出土の石器、土器について

金立、久保泉地区は昭和30年代に大規模なミカン園の造成工事が行われたが、それに伴い、埋蔵文化財の破壊も多数あったと想像される。このような破壊行為の中で心ある人は出土した土器、石器類を私するのではなく、久保泉公民館に寄託している。その資料の一部が現在久保泉公民館に保管されていたので(以前概略を記した書物に載っているかも知れないが)、これらの資料を今回の報告書で紹介し、今後の久保泉地区の埋蔵文化財調査の一資料としたい。また、佐賀市教育委員会が保管していて詳しく報告されていない資料も同時に報告したい。

久保泉地区出土土器観察表

(1) 口縁径
(2) 器 高
(3) 底 径 単位 (cm)

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	出土地点 そ の 他
1	壺	(1)外径 10.5 内径 7.6 (2) 9.9 (3) 5.0	平底を有しわずかに外 反しながら大きく開き 胴部は張っている 頸部は内面に稜を有す る 口唇端部はややうすい	外面は不特定方向への 刷目 内面は胴部から底部に かけて指頭圧	ほぼ完形
2	器台	(1)受部径 6.0 (2) 10.1 (3)脚部径 12.3	クビレは上半にあり全 体に厚く裾部は広がっ ている	外面は指頭圧と木口状 工具によるナデ 内面受部はヨコ方向の ナデ胴部から裾部にか けては指によるナデ	ほぼ完形

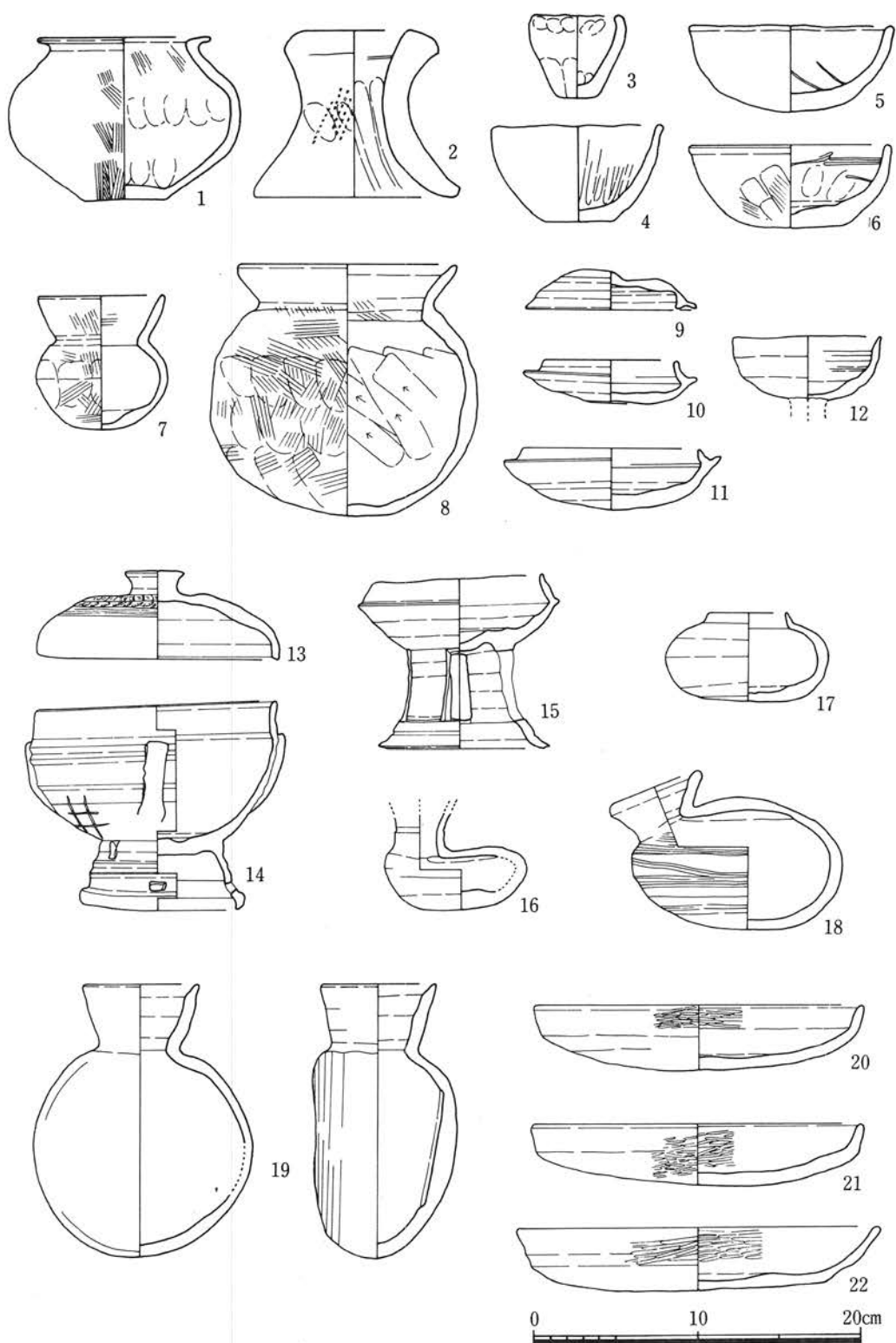


Fig. 6 久保泉地区出土土器実測図

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	出土地点 そ の 他
3	手握	(1) 5.2 (2) 4.95 (3) 2.6	平底を有しわずかに外 反しながら立ち上り、 口縁部で内湾する 全体に厚手である	外面・内面共に指頭による調整 不特定方向のナデ	ほぼ完形
4	鉢	(1) 10.1 (2) 5.8 (3) 4.2	平底を有し内湾しながら立ち上る 口唇部は丸味を帯る	外面 不特定方向へのナデ、顔料塗布の痕跡あり 内面 ナデとヘラ状工具によりタテ方向のナデ	完 形
5	坏	(1) 12.2 (2) 5.2 (3) 丸底	厚味のある丸底で内湾しながら立ち上り、口唇部は丸味を帯る	外面 指による強いナデ 内面 ヘラ磨きのようである	ほぼ完形
6	坏	(1) 12.0 (2) 5.05 (3) 6.5	丸底に近いような平底を有し全体に厚手 口唇部は丸味を持ち胴部に対して薄手である	外面 回転ヨコナデのあとヘラで面取りをし、そのあと不特定方向へ刷け目 内面 回転ヨコナデのあと指頭によるナデ、二条〜一条の沈線を施すが一周していない	完 形
7	小形 丸底埴	(1) 7.6 (2) 8.1 (3) 丸底	体部は丸く張った胴部を持つ、頸部はくびれ 口縁部に開く 口縁端部はわずかに稜を有する	外面 不特定方向への刷目、そのあと押圧 内面 ヨコ方向のナデ	
8	壺	(1) 13.3 (2) 15.3 (3) 丸底	頸部は「く」の字状になり、口縁部は外反する 端部は稜が認められる 体部は丸味を持ち張っている	外面 不特定方向の刷目 そのあと押圧 内面 ヘラケズリ	完 形

番 号	器 種	法	量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	出土地点 そ の 他
9	坏・蓋 (須)	(1) (2) (3)	10.6 2.3 —	天井部は丸く、つまみ はついていない 体部と口縁部の境に稜 を有する	外面、内面ともに回転 ヨコナデ ロクロ回転 左	ほぼ完形
10	坏・身 (須)	(1) (2) (3)	8.1 2.6 —	立ち上りが短く内傾す る口縁部は丸味を持つ	外面 回転ヨコナデの あと底部は回転ヘラケ ズリ 内面 回転ヨコナデ ロクロ回転 右	完 形
11	坏・身 (須)	(1) (2) (3)	10.8 3.8 —	ゆるやかに立ち上る 口縁端部は尖り気味で ある	外面 回転ヨコナデの あと回転ヘラケズリ 内面 回転ヨコナデ ロクロ回転、左	完 形 ヘラ記号
12	高坏・ 坏部 (須)	(1) (2)	8.8 3.8(残)	ゆるやかに内湾しなが ら立ち上る 口縁端部は丸味を帯る	内外面共回転ヨコナデ	ヘラ記号
13	蓋	(1) (2) (3)	14.7 5.4 —	口縁はわずかに内湾し 端部内側に段が一段あ り外側は尖っている 外面 天井部に扁平な つまみがつく	内外面とも回転ヨコナ デ 外面 天井部つまみの 外面に櫛目文を二条、 その外周にカキ目をめ ぐらす	完 形
14	高坏	(1) (2) (3)脚部径	14.5 12.5 9.3	体部は丸味を持って立 ち上る 口唇部は丸味 を持つ 体部に耳を 3 個等間隔に取り付ける 脚部に方形の焼成前 尖孔を 3 個、二段にあ ける	回転ヨコナデ 耳をあとから取り付け る	ほぼ完形 ヘラ記号

番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	出土地点 そ の 他
15	高 坏	(1) 10.3 (2) 10.4 (3)脚部径 9.6	坏部の口縁端部はわずかに丸味を帯びる 体部と底部の境は角ばる 脚部は外反し長方形の一段透しを4個あける 透しの下に沈線を二条めぐらす	回転ヨコナデ 透しは焼成前尖孔	完 形
16	横瓶	(1) — (2) 5.8(残) (3) 丸底	口頸はやや垂直に立ち上り上方に開く 体部は全体に扁平である	全体にヨコ方向のナデ 下半部 回転ヨコナデ	
17	短頸壺	(1) 4.8 (2) 5.4 (3) 6.7	小形の短頸壺で胴部が張り出し扁平な壺である	口縁部ヨコ方向のナデ 全体にカキ目調整	完 形
18	横瓶	(1) 5.5 (2) 9.6 (3) 丸底	口縁部は漏斗状をなし上外方に開き体部の中心から外れて接合される 体部は全体に丸味を帯びる	体部全体にカキ目を施し、その後体部中央に回転ヘラケズリをする	完 形 板 目
19	提瓶	(1) 7.0 (2) 16.7 (3) 丸底	体部は円形に近い 前面は丸味を帯び、背面は平である 口縁端部は薄い	頸部に口縁部と体部を取り合せた痕跡 体部の前面に取り合せ痕ナデ調整	ほぼ完形
20	坏	(1) 20.0 (2) 4.0 (3) —	底部は丸味を帯び底部と体部の境の屈曲はゆるやかである 口縁端部は丸味を帯びる	内外面ともヨコ方向のナデのあと丹念にヘラ磨きを施す 内外面とも丹塗りを施す	完 形
21	坏	(1) 19.85 (2) 3.7 (3) —	底部は丸味を帯び体部と底部の境はゆるやかである 口縁端部は丸味をおびる やや厚手である	内外面ともヨコナデのあと丹念にヘラ磨きを施す 丹塗りを施す	完 形
22	坏	(1) 22.0 (2) 3.8 (3)	底部は丸味を帯び体部と底部の境はゆるやかである 口縁端部に掛けて薄手になり、丸味を帯びる	内外面とも丹念にヘラ磨きを施す	

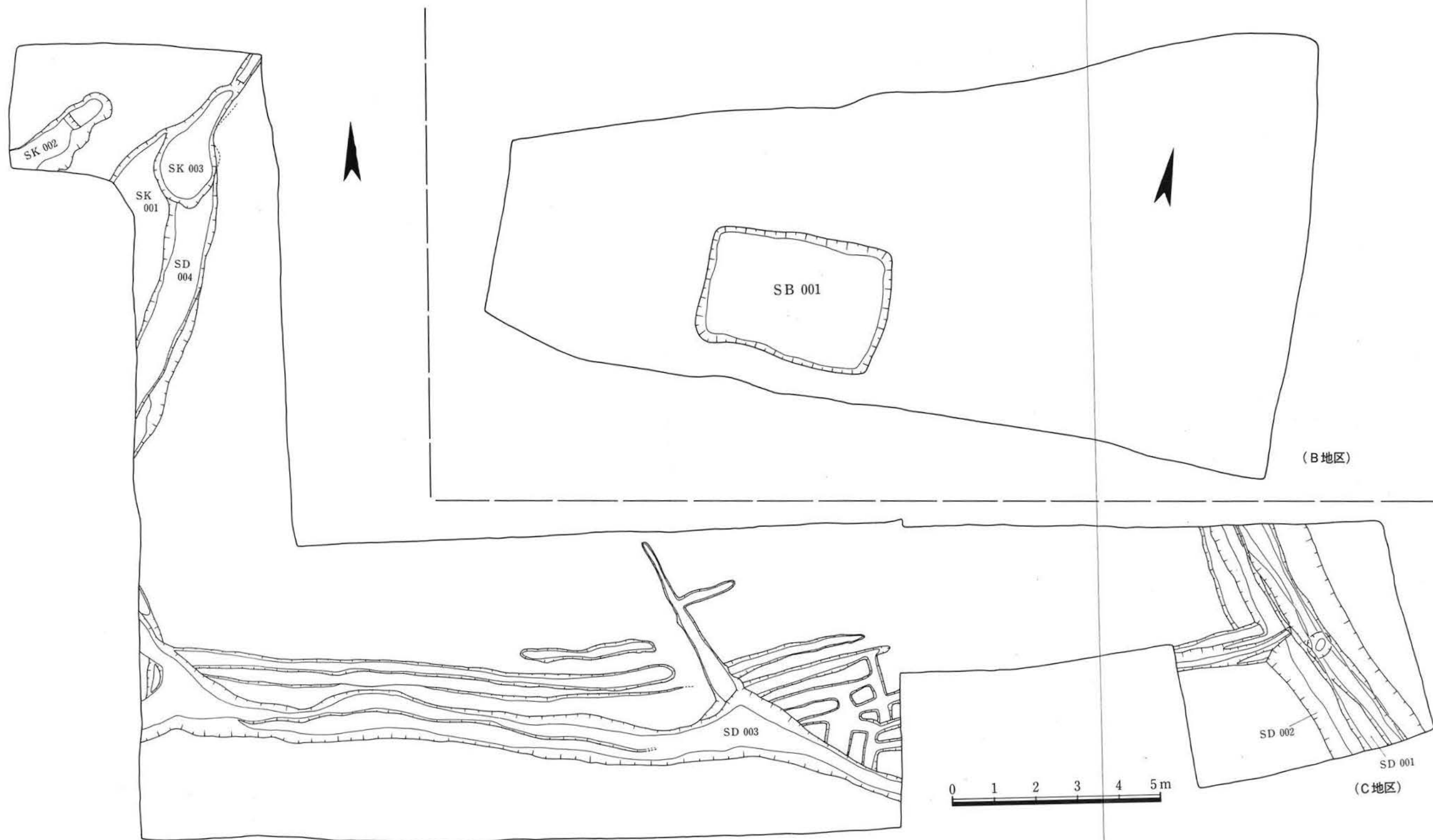
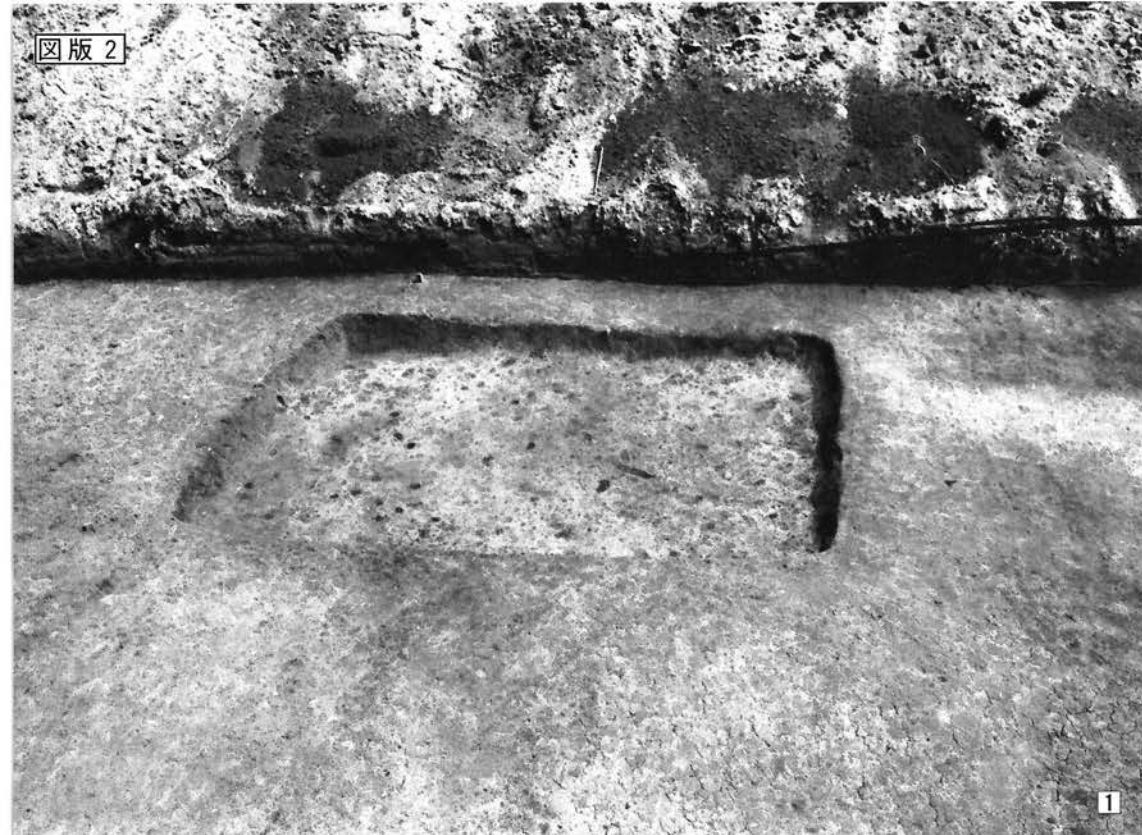


Fig. 7 泉遺跡遺構配置図

版 図



1. 発掘調査前 (B地区)
2. A、B地区遠景
3. 発掘調査前 (C地区)



1. 住居址状遺構 (B地区)
2. B地区全景



1. SD001、SD002 溝
2. SD003 溝 (表土はぎ後)



1. SD001、002 溝
2. 第1トレンチ (SD001、002 延長部)



1. SD003 溝
2. SD003 溝



1. SD003 溝

2. SK001、003 土壌、SD004 溝



1. 第3トレンチ
2. 第3トレンチ (拡大)

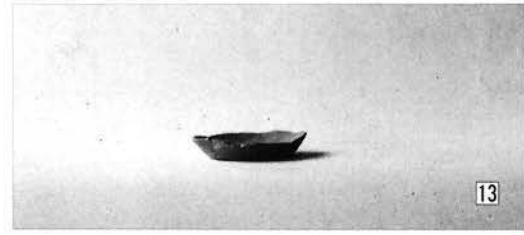
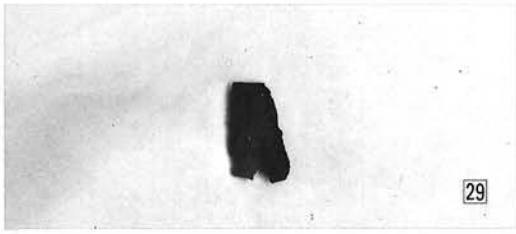
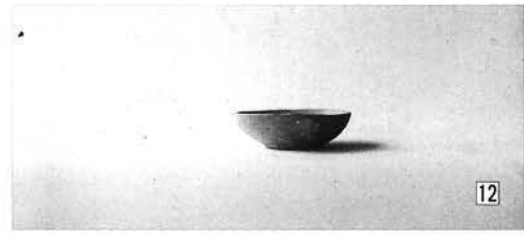
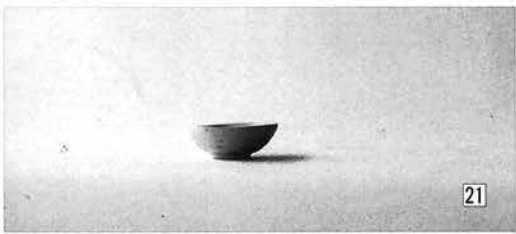


1. 第2トレンチ

2. 第2トレンチ (南部)



1. 表土はぎ状況
2. 遺構検出状況



佐賀市文化財調査報告書第16集

泉 遺 跡

昭和61年 3 月

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 (株) 宮 地 印 刷
佐賀市長瀬町11-20